

スチールデザイン

No.32



京都府立京都学・歴彩館

設計
飯田善彦建築工房

構造
構造計画プラス・ワン

編集委員

委員長：高梨 晃一（東京大学名誉教授）
委員：隈 研吾（建築家）
委員：佐々木睦朗（構造家）
委員：手塚 貴晴（建築家）
委員：西沢 立衛（建築家）
委員：白田 哲男（編集者）
委員：一戸 康生（新日鐵住金）
委員：下川 弘海（JFE スチール）
委員：窪田 伸（新日鐵住金）
委員：植戸あや香（JFE スチール）
委員：寺澤 伸治（神戸製鋼所）

分節した大屋根を 細い部材からなる 空間に架ける

飯田善彦（飯田善彦建築工房）
渡邊文隆（飯田善彦建築工房）
金田勝徳（構造計画プラス・ワン）
早稲倉章悟（構造計画プラス・ワン）
植戸あや香（編集委員・司会）

「京都府立京都学・歴史館」は、京都府立総合資料館、京都府立大学文学部とその図書館、新たに設立された京都についての研究・発信拠点となる京都学センターの4つが入る複合施設。京都の町をイメージした南北に長いプランの上には、大きい屋根を分節してつくられた大きさも勾配も異なる屋根が重なるように架かり、長手方向は壁をつくらず格子状のラチスプレースを採用することで、明るく透けた空間を実現している。国際コンペの段階から実施設計・施工までの話をうかがった。

資料館、大学と 交流の拠点をひとつに

はじめに建設に至るまでの経緯を
教えてください。

飯田●2011年に、京都府の既存の資料館の建て替え計画として、資料館、それから隣接する京都府立大学の文学部と図書館を合わせた新しい施設の国際コンペが行われました。それに加えて、京都の歴史や文化、技術や思想などを研究し、発信・交流していく拠点として新たに「京都学センター」とい



飯田善彦氏

う機能を加えることが求められました。コンペは100を超える応募があつて、一次選考で5者に絞られ、その中からわれわれが最優秀賞に選ばれて実際に仕事が始まりました。

敷地は下鴨中通に沿って南北に長く、北側には京都コンサートホール、南側には京都府立大学があります。周りは住宅地なので、あまり大きく感じるボリュームにならないように配慮が必要でした。

また、今回資料館と大学の図書館が一緒になるわけですが、資料館は古文書や公文書などを扱い、国宝も所有しているようなところで、アーカイブとして歴史があります。一方、大学の図書館はそれに比べたら規模も小さいですし、管理の仕方も違います。また学生が主体で、市民の方も利用するかもしれません。京都府は、そのまったく違うものを一緒にして市民に開かれた

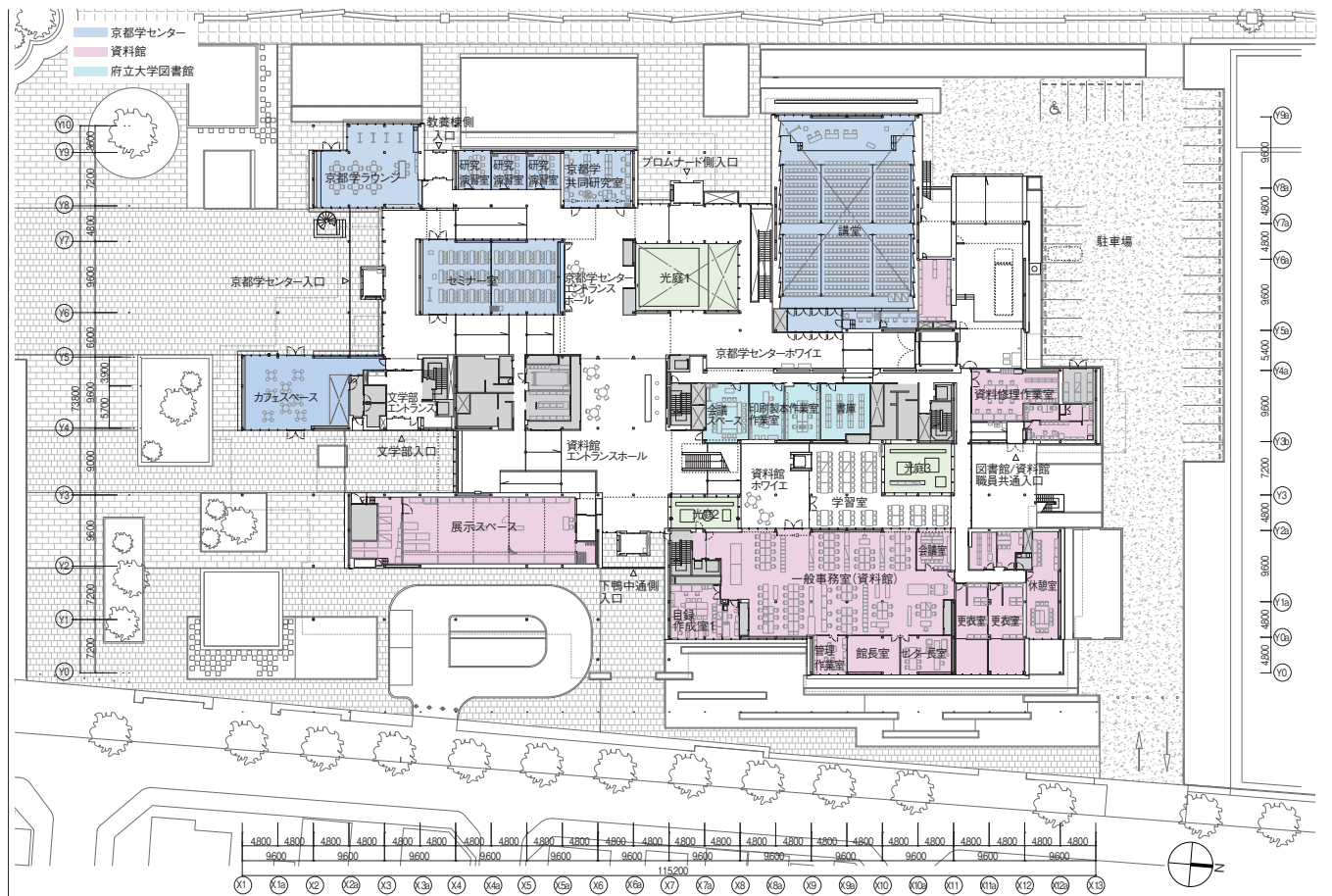
新しい複合施設をつくろうとしていました。そのために、内部の調整にすごく時間を要し、結局コンペを取ってから竣工までに5年ほどかかっています。

私たちの事務所は横浜にありますが、この仕事を受けた時から毎週京都に通い、各部門の方たちと打ち合わせをし、調整しながらプランニングを決定していきました。それと併行して構造や設備の細部も調整しています。

建物を町のように構成

建物の設計コンセプトを教えてください。

飯田●京都の町を歩くと、番地を見ても分かるように、道が町を構成するうえで重要なものになっていることが分かります。また、町家が並び、小さな屋根が重なるように寄せ集まっている



1階平面図 1/1000

風景も印象的です。こういった京都らしさが建築のイメージに投影されるように、町の面白さを平面に落とし込み、それを守るように大きな屋根が架かる建築にしたいと考えました。

平面は約120m×80mという大きさで、地上4階、地下2階建てです。内部のプランは、南北に長い4つの街区と、その間を吹き抜け空間が街路のように繋いで、建物をひとつの町のように構成しました。2階、3階ではそれらの街区をブリッジで繋いでいます。

屋根は、最初は小さな屋根を集めて構成するイメージでしたが、最終的には大きい屋根を切り開いたり、ずらしたりして分節することで町並みのスケールと調和するようにしました。場所によって大きさも傾斜も異なりますが、構造的にはそれら全体で大きなひとつの屋根になるように設計しています。屋根を開いたところからは光を取り込み、2階の吹き抜け部分にある閲覧スペースは昼間は人工照明なしで本を読めるように日射量のコントロール

もしています。

それから、建物は4階建てですが、道に向かってだんだん階数を低くして、町と連続するようなことも意識しました。

柱サイズはすべて 250mm角に統一

大きな建物ですが、柱などの部材はとても細いですね。

飯田●細い部材で構成されている大きな建築にしたかったのです。ただし、京都で大きい屋根という何となく和風のイメージになりますが、そうではなくて、むしろ構造のありようも含めて和風にはしたくありませんでした。

そこで私がお願いしたのは、柱のサイズを全部同じにしたいということ。たとえば4階分の高さをもつ柱も、1階分の軒を支えるような柱も、階高にかかわらず柱径は全部同じとし、250mm角に落ち着きました。

250mm角というサイズはどのように決まったのでしょうか。

金田●軒底だけを支える柱は250mm角くらいで収めないと庇の大きさとのバランスが悪いということから、全体の柱の太さを決めました。もちろんその前提には、地震時水平力のほとんどをブレースないしはラチス材に負担させるということがありました。

飯田●柱の寸法をすべて250mm角にするというのはとても大変なことで、既製品の250mm角の柱を使えるところもありますが、これは角が丸く、それでは耐力が不足するところは特注でつくらなくてはなりません。さらに、同じ250mm角でも既製品と特注したものでは仕上がり方も違うのですが、今回はその違い自体は理にかなったことなので、そのまま現わしています。

同じ250mm角でもBCR(冷間ロール成形角形鋼管)とビルトアップコラムを使い分けされているということですね。どのように使い分けているのですか。



2階の吹き抜けにある一般閲覧スペース。屋根を構成する斜め梁と格子状の耐震ラチスブレースが見える

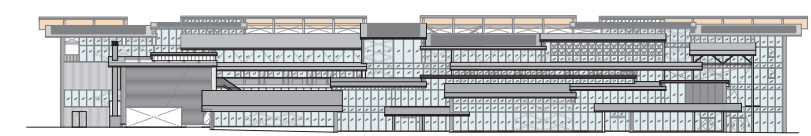
金田●単純です。BCRでは強度が足りないところはビルトアップボックスコラムにしました。

早稲倉●応力に合わせて部材断面を決めています。それから、ラチスブレースのせいも250mmとし、柱せいに合わせているのですが、柱がBCRでは角部にブレースフランジを直接溶接できないため、そのような場合にもビルトアップボックスコラムを採用しています。

ラチスブレースを用いて透ける空間をつくる

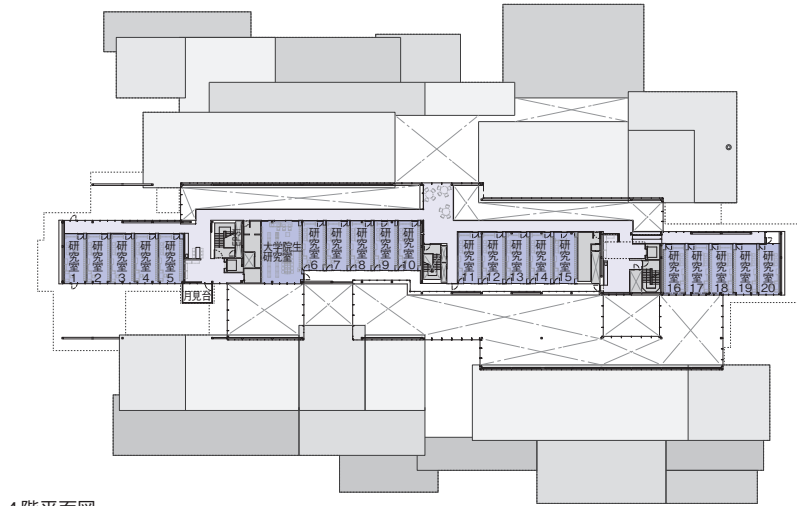
ラチスブレースについても詳しく教えてください。

飯田●今回、細い部材を組み合わせて透ける明るい空間をつくりたかったので、できるだけ壁をつくらず、ほとんどの構造を露出させました。そうすると当然水平力(地震力)を受けるための耐震要素をどうするかを考えなくてはなりません。そこで、斜め格子状の耐震ラチスブレースを用いました。



西立面図 1/1200

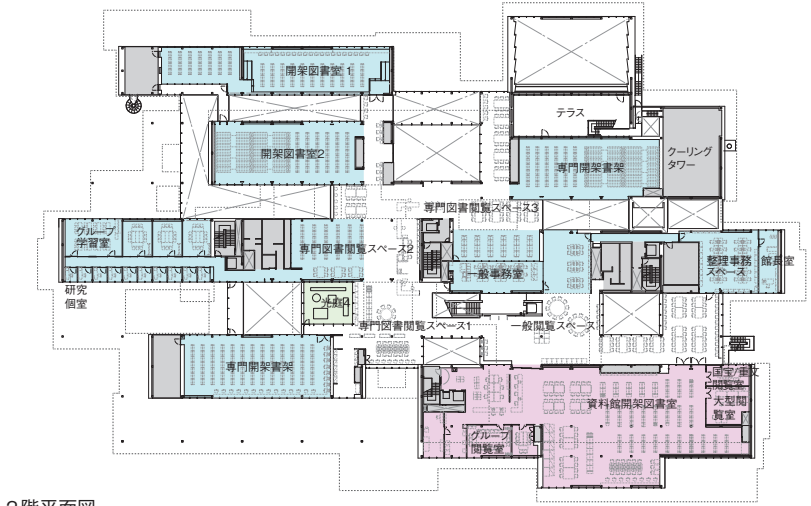
京都学センター
資料館
府立大学図書館
府立大学文学部



4階平面図



3階平面図



2階平面図

コンペの二次審査の時は全部の耐力壁をラチス状にしていたましたが、北側と南側の妻面はラチスの角度と屋根の角度が合わないし、設備的な要望もあって、結局コールテン鋼(耐候性鋼)の有孔パネルで覆って構造が見えないようにしました。

その中にブレース構造が入っているということです。

飯田●はい。妻側の壁の中には普通のブレースが入っています。この壁の中に排気などの設備シャフトを集約できたので、結果的にここは壁でふさいでよかったですね。

コールテン鋼は汎用材である3.2mm厚を使っています。今回はこれにプレパレン処理と呼ばれる錆安定化処理を行いました。初め茶褐色ですが、10年くらいすると表面に塗られた仕上がりなくなり、その間に中の錆が進行しながら安定します。色は少し明るく変化するはずですよ。

一方、東側と西側の長手面に関しては当初の計画通り、ラチスブレースにしました。

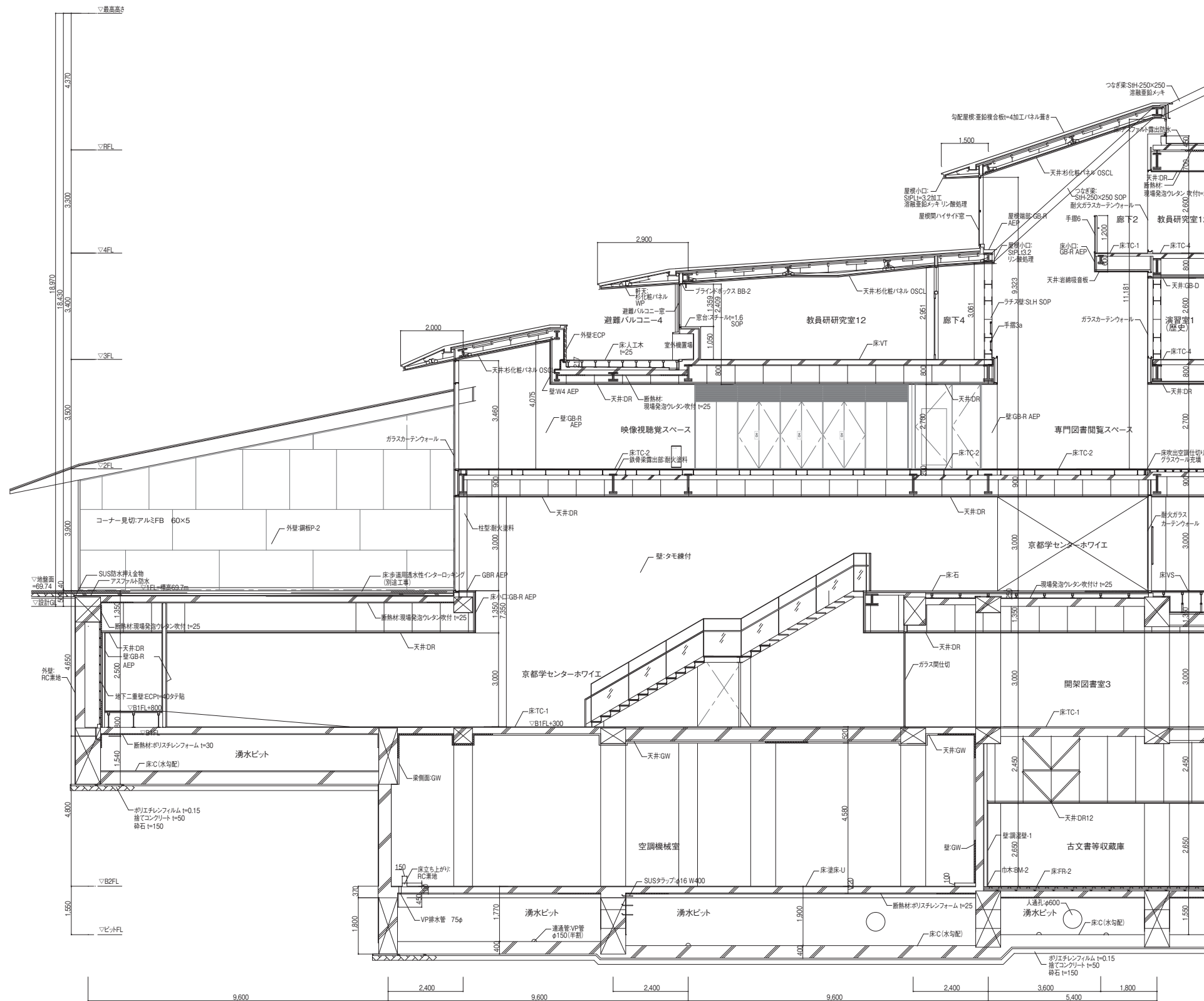
金田●ラチスブレースは制作に手間がかかりお金もかかります。ですから、見えるところはラチスブレースでしっかりときれいにしつつ、隠れるところは実用的な普通のブレース構造にしました。

ラチスの部分は、H形鋼を弱軸使いにしました。強軸を座屈長さの長い方に向けた方が圧縮耐力が上がり有利ですし、フランジ面が立面的に見えてくる方がきれいだと思ったからです。

早稲倉●強軸使いにしまうと梁せいが見えることで見付が大きくなってしまいますので、弱軸使いにしたほうが細



渡邉文隆氏



短手断面詳細図 1/150



金田勝徳氏

く見えます。

外壁面や吹き抜け部などラチスブレースが連層で見えるところは、床を支える梁をセットバックして柱からずらしています。梁が床を支えているのですが、ブレースが勝っているように見えて面白い部分だと思います。

渡邊●通常ブレースは床で切れてしま

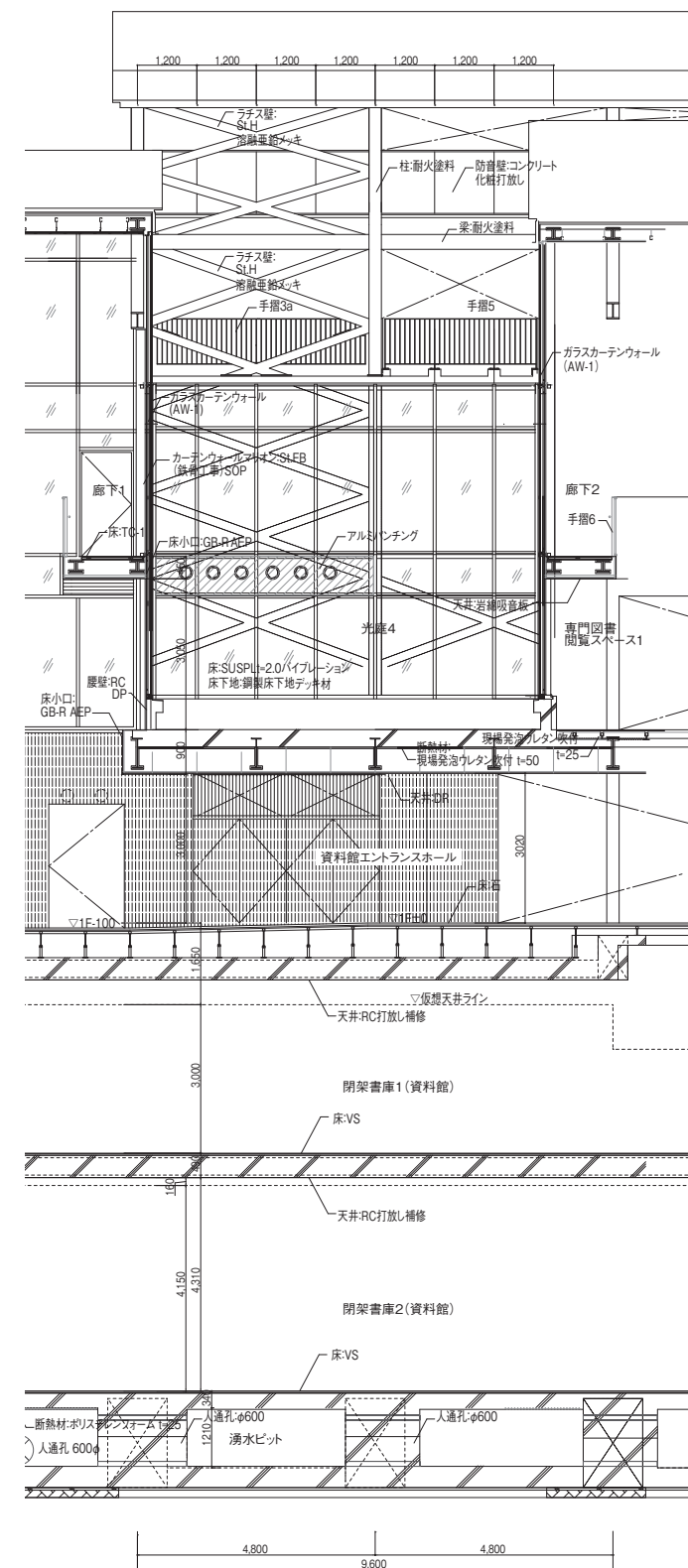
いますが、ラチスブレースの連続性を優先させました。

飯田●今振り返ってみると本当にいろいろな工夫をしましたね。屋根を支える斜め梁は見えませんが、力を伝えていく梁は飛梁として見せています。

早稲倉●柱だけではなく梁も見え掛かりとなる箇所は250mm角にしていま

す。そのため、ビルトアップボックスコラムの一番応力の大きい箇所は板厚が60mmにもなっています。

金田●ブレース・ラチス架構両側の柱は大きな軸応力が作用するため極厚のボックス柱になります。ボックス柱の中空部分が全部ふさがってしまうんじゃないかというくらいです。



長手断面詳細図 1/150

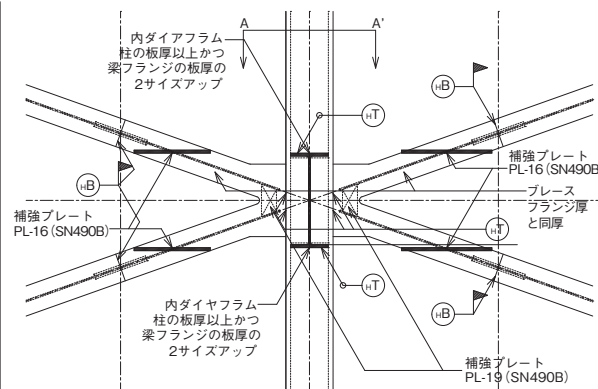
BCRに比べるとコストもかかりますよね。

金田●もちろんそうですね。普通60mmも厚みがあつたらBCR材で400mm角あってもおかしくありません。

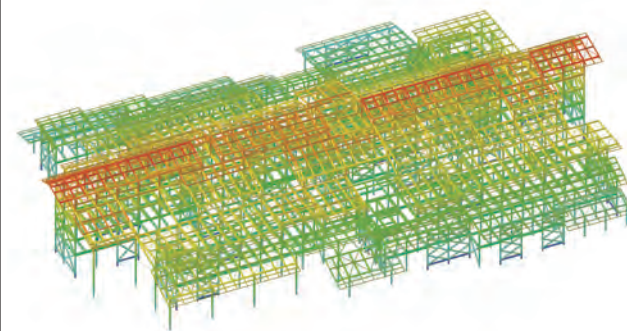
ちなみに鋼材の鋼種はなんですか。



早稲倉章悟氏



ラチスブレース詳細図 1/40



変形解析図 赤い部分が変位が大きい

早稲倉●490材です。

金田●最初コンペ応募案を見せていただいた時は、これは大変な建物だなと思いました。なにしろ屋根がたくさんあって、しかもそれらが一定の勾配ではないわけです。場所によっては逆勾配の屋根もあるし、屋根相互が交差したりもする。これらの分節された屋根を、構造的に一体にするにはどうするか、だいぶ考えました。飯田さんと協議を重ね、結果的には飯田さんが最初に言われたように、大きな屋根を基本として、それを切り開いたりずらしたりする構成にすることになりました。それならば主構造は一体の大屋根架構として、分節された形の屋根は二次部材として構成することができる。あとはブレースやラチスブレースで地震力のほとんどを処理できれば、なんとか250mm角の柱でいけるだろうということになりました。

飯田●スパンもいろいろですからね。

早稲倉●唯一調整してもらったのは、桁行方向の柱のスパンです。当初の8mから4mに変更をお願いしました

が、それによって地下の架構も含めて上手く整理することができました。

また、分節された屋根をブレースが設けられた主要なコアまでいかに繋ぐかが、構造的には重要な問題でした。屋根は細かく分けられており、それぞれの屋根にバランスよくブレースを配置することができませんので、そのままでは屋根が別々に揺れてしまいます。

そこで、桁行方向には「欄間ブレース」と呼ぶフラットバーのK形ブレースを、梁間方向には上下の屋根の建物中央側端部を斜めに結ぶ「繋ぎ梁」を配置しました。こうして屋根同士を相互に繋ぐことで、少ないブレース配置でも全体が補い合って成立しています。

繋ぎ梁もひとつひとつ特徴が異なり、H形鋼の側面にプレートを貼ることでボックス梁として座屈補剛をしているものや、接合部だけ補剛しているものなどいろいろで、構造的な役割も違ってきます。ボックス梁となっている箇所は、見え隠れとなってる箇所にブレースが取り付けいており、そのブレースに力を伝えていく役割があったりし

ます。細かく現場を見てみると、同じように見える梁でもそれぞれの重要度が違うのが分かって面白いです。

鉄骨の耐火被覆は塗料を使われたのでしょうか。

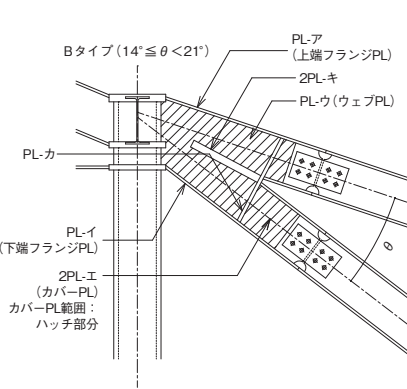
飯田●鉄骨現し材は、柱、梁ともすべて耐火塗料(1時間耐火)を使用しています。

引き抜きに対応するため地下は部分的にSRC造に

地下の構造についても教えてください。

飯田●全体は地下2階、地上4階建てで、地下の2層分は延床面積の半分の12,000㎡という大きさがあります。地下は基本的にRC造ですが、鉄骨が地下2階からそのまま上に伸びている箇所もあって複雑な構造になっています。

渡邊●地下の階高を揃えればいちばん楽にできるのですが、この建築面積で地下を1m余計に掘ると1億円建設費





2階の一般閲覧スペースから西側を見る。内外が交じりながら奥のスペースまで見通すことができる

ンクリート部分に移行するのに1層分ないしは2層分の高さが必要でした。

設計意図の伝達が精度の高さに繋がる

施工はどちらが担当されたのですか。

飯田●基本的には竹中工務店が担当しています。ファブリケーターは竹島鉄工建設というところで、ものすごく精度が高くって優秀でした。

僕は竹中工務店に頼まれて、最初に竹島鉄工建設を尋ねて職人の皆さんになぜこういう建築を考えたのかを話してきました。通常僕らの意図を直接伝達できる機会はほとんどありません。

ましてや鉄骨を担当してくれるファブリケーターまで行って話をする機会なんてまずない。でも竹島鉄工建設ではそういうことを教育としてきちんと行っているんですね。

建築って概念的な話から始まるわけです。こういうことをやりたいがためにこういう建築にしていこうというように、何らかの筋立てでモノに落としていく時にそこで無数のやり方があるなかで、たったひとつのことに決めていきます。その結果として、できあがった建築がある。そのプロセスも含めて一期一会のようなところがあります。例えば違うファブリケーターだったらまた違うディテールだったかもしれないし、それは設計の意図だけではなく

て、どうつくるかという話を一緒にしていかなくってはなりません。ですから今回事前に話す機会をいただけてすごくよかったと思います。

建て方はどのような順番で行われたのでしょうか。

飯田●全体を4つの工区に分け、北から南に向かって順に建てていきました。**渡邊**●鉄骨も1工区の4階が組み上がっている時にまだ4工区は何も建っていないという状況でした。ですから、全体の鉄骨がなんの仕上げもない状態で立ち上がっている姿を見ることができませんでした。最初の工区の仕上げ工事が始まっているところに最後の工区が立ち上がり始めていましたから。

飯田●そうでしたね。この建物は現場溶接が多かったので、建てる順番については竹中工務店が、いちばん誤差が少なくなるように調整してくれました。

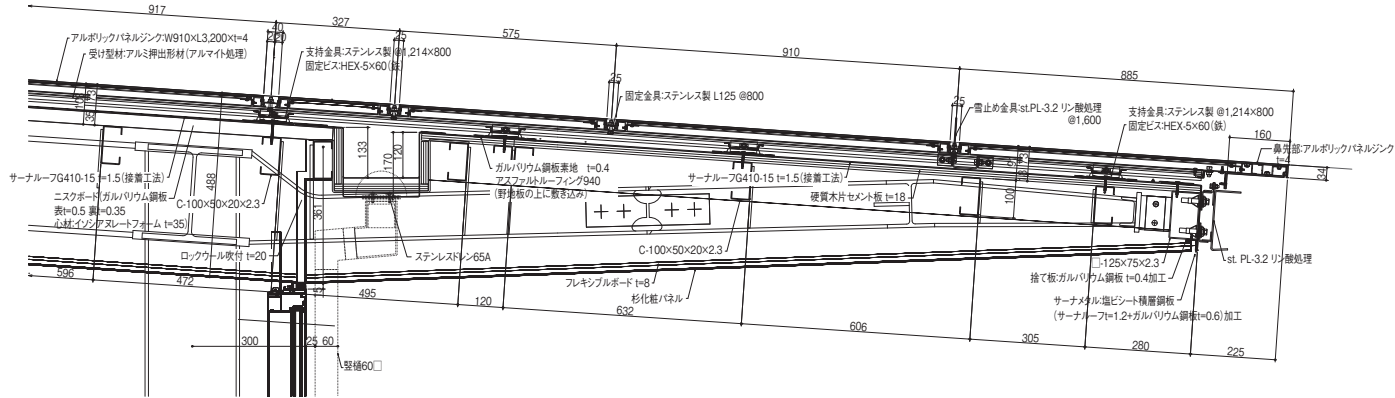
それから収蔵庫が地下にあるということとは地震の時は安定しますが、水や湿気の問題もあります。さらに収蔵物は国宝もあれば一般の本もある。つまり、ある領域は恒温恒湿にする必要があるけれど、別の領域はそれほどでなくてもいいというようにランク分けもしていました。ですから構造だけではなくて、設備環境なども含めて非常に複雑な建築なのです。

屋根の角度で採光をコントロール

たくさんの屋根が載っていますが、仕上げについて教えてください。また、屋根の角度はどのように決めたのでしょうか。

飯田●屋根はコンベの時にはアルミにするつもりでしたが、アルミにすると京都特有の景観条例に引っかかってしまい使えませんでした。京都は明るすぎる屋根はだめなのです。

そこで亜鉛合金のアルポリックを使いました。これはマンセル値は銀鼠瓦と同じで性能的にはアルミと同等に熱を半分以上反射するような材料です。



屋根部詳細図 1/20

止水面としてシート防水処理をした上に防水保護と熱反射を兼ねてアルポリックパネルを取り付け、二重屋根の構成としています。1,000㎡程度のソーラーパネルも載せていますが、ソーラーパネルとアルポリックの下地材を共通にすることで、納まりの厚みがほぼ一緒になるようにしています。

屋根がこれだけたくさんありますし、どのように雨水を処理していくかは重要です。樋は屋根の厚みの中に設けて、そこからの雨水もほとんど分からないような処置で流しています。

また、屋根の先端は上を削いでいる場合と下を削いでいる場合があります。これはこの屋根の下空間に光を入れるか、むしろ光を遮断するかを考えて形状を決めました。

渡邊●こういう光の量の調節は場所場所で決めています。閲覧室のように光を採り入れたい場所なのか、重要な書籍が置いてあって光がなるべく入らないようにしたい場所なのか、その機能によって屋根の角度を変えています。

各部屋に入る光の量は解析などを行ったのですか。

渡邊●設計の中で採光シミュレーションを行っています。屋根勾配の組み合わせのパターンをつくって、どのように光が進むのかを図面と模型を使って1箇所ずつチェックしながら決めていきました。それによって屋根の枚数を少し減らす場所が出てきたり、屋根の先端の勾配を決める時の参考にもしています。



屋根を北側から見る。屋根の角度や先端の勾配はひとつずつ異なる

吹き抜けを介して異なる活動が交差する

動線で工夫されたことを教えてください。

飯田●1階、2階は誰でも入ることができるオープンなスペースで、3階、4階は大学になっています。例えば2階の図書館にいと上の方にブリッジがあって、そこを学生が歩いている様子が見えます。同じ建物の中にいろいろな世界が重なっているの、それが町のような見え方をしていこうと考えました。セキュリティー上、3、4階の大学部分専用のエントランスを設けていて、どこからでも行けるわけではありません。2階にいとすぐ近くの3階に人がいるのが見えますが、そこから3階へ直接は行けない構造になっています。

渡邊●見えているけれど行くことができない場所があって、違う目的で集まった人たちの気配をお互いになんとも感じられる場というのが町らしい

と考えました。2階には地域の人に来ていて、3、4階には学生がいる。吹き抜けにいと、そういう別の活動をする人が交差して見えます。

飯田●梁が飛んでいたり、隙間から光が入ってきたりと、吹き抜け部分はとても面白い空間になっていると思います。

また、時間とともに太陽が動き、部屋の中にも光の質が変わっていくことが体感できるのです。

日中は照明なしでも十分明るいのですか。

飯田●本当に明るい時は照明はいらないと思います。実際に点けているかは別にして、ちゃんと光を制御して採り入れていと、相当節約になるだろうと考えました。吹き抜け部分にある閲覧スペースは、そこで本を読む分には日中は人工光はいらないでしょう。

金田●そこが意匠と構造のせめぎ合いのところでしたね。構造的には屋根を一体の平面剛性を持ったものにしたい。だけど意匠的には分節して自然光が入



東側の資料館のエントランスを見る。軒を支える柱は建物の他の柱と同様すべて250mm角。屋根の天井部分には仕上げ材としてスギを使用

る空間にしたい。それを実現するために欄間ブレースを入れたり、斜め梁を入れたり、そういう折り合いを付けないから設計をする必要がありました。

竣工してから2年近く経ちますが、使われ方など、当初のイメージ通りになっていますか。

飯田●当初は新しい次の時代に対する図書館をつくらうという大きな目標を持っていたわけですが、まだ資料館は資料館、大学は大学が管理をしているのでなかなかひとつの体制にならないのが現状です。管理体制の見直しも含めて、これからだと思います。外構もまだ整備されていませんね。

実際の使われ方もまだそこまでオープンにはなっていません。ただ、1階の資料館の展示スペースは結構使われているようです。

複雑な建物をシンプルな構造で解く

最後になりますが、この建物に携わった感想や、今後の鋼構造への期待などをお聞かせください。

早稲倉●この建物は複雑な部分が多かったので、構造の考え方だけはシンプルにしたいという思いがありました。ばらばらに見える屋根ですが、桁行方向の段差部には欄間ブレースを設け、梁間方向のレベル差は繋ぎ梁で一体化するという屋根を安定させるためのルールをつくり、それに従って部材配置を決めていきました。

耐震要素について、見え掛かり部分をラチスブレース、見え隠れ部分を通常の耐震ブレースとしたのもルールのひとつです。いろいろな応力の違いで板厚等の部材断面が変わっていくところはありましたが、解き方を統一することはできました。

ルールをつくることで、意匠設計者とも何を検討すればよいかという問題点を共有でき、意匠や設備との納まりも包括的に解いていけたのでよかったと思います。

飯田●基本的にはコンペの時の案が実現しましたね。

渡邊●複雑なものを複雑なままに見せているのですが、そのなかで整理している部分もあって、純粋な最初のコン

セプトで考えていた全体像からできるだけ外れないようなディテールを局所局所でつくっていきました。

鉄骨の種類が多くて、仕口もひとつずつ違うので、施工図のチェック量も今までのプロジェクトとは比較になりませんでした。

飯田●この建物の延床面積は24,000㎡で、私たちが手掛けたものとしてはこれまでで最大規模の建築でした。京都的な町の構造をできるだけ細やかに表現しようとしたので、大きいものを細いものでつくと当然部材の数は多くなるわけですが、やはり組み立て方も含めて空間の構造そのものが、鉄骨構造に顕著に表れています。逆に言うと、こういう鉄骨構造でつくられる空間だからこそ身体性も含めて感じられるような、親密な空間になっていると思います。今回細い部材を使いながら組み立てたのは正解だったと思っています。

RCと鉄骨と木とそれぞれ性質は異なりますが、さまざまな使い方で多様なものがつくれるという点で鉄骨造は面白いと思います。

早稲倉●この建物は施工者にもファブ

リケーターにも恵まれて実現できたと思います。この時もすでに鉄骨の価格は上がっていましたが、そのあとの上がり具合を見るとギリギリ良い時期に建てられたと思います。今同じようなことができるかという、なかなか難しいのではないのでしょうか。やはり工事費が高騰しているなかで、こういう複雑なものができるのか、やろうという気力がある業者が減ってきてしまっていると思います。当然建物に魅力を持たせて発注者もそれに見合う費用を払ってくれて建物がつくれるのがベストですが、それを実現できるファブリケーターがどれだけ残っているかは気になるところです。将来またこういう複雑なものをつくる機会があった時、技術力はもちろんですが、協働してくれる熱意が残っていてくれたらなというのが鉄骨業界に対する希望です。

金田●鋼材についての希望は無理を承知で申し上げますが、強度を高くするにはどうしても炭素を多く入れるので、靱性が少なくなります。けれど建築に使う場合は、強度だけではなくて靱性もほしい。それから、揺れや変形を抑えなくてはなりませんから、そのためには剛性を上げなくてはなりません。もちろん強度を高くするのも大切で使い勝手がよくなりますが、それだけではなくて靱性や剛性、それに溶接性も上がるといいなと思っています。

早稲倉●私は熱押形鋼の製作可能サイズがもっと大きくなってくれたらいいなと思っています。設計の初期の段階で、熱押形鋼を組み合わせて柱をつくれないうという相談もありましたが、小径のものしか製作できないため耐力的にも難しく、マリオンにのみ採用することになりました。今回ビルトアップボックスコラムで250mm角の極厚な柱をつくりましたが、熱押形鋼でそれがつくれば設計の幅も広がります。

それができなかったため、複雑な屋根の仕口部分にだけでも既製品を使えないかと考えましたが、屋根自体を薄くしたいので、そうすると既製品が屋

根内に納まらなかったり、仕様規定に合わなかったりと使用できませんでした。もっと汎用性の高い製品があるとよかったなと思っています。

金田●ファブリケーターもミルメーカーもそうですが、最近なるべく製品サイズの選択の範囲を狭くして効率を高めようとしていますね。それは今の状況からは仕方がないのかもしれませんが、われわれにとっては自由度が少なくなってしまう。一方でやはり適材適所にできるだけいろいろな製品を使いたいという気持ちがあります。

それから、施工図をそれなりの時間をかけてチェックしていきたいというのも正直なところ。どちらかの一方的な話ではなくて設計者、施工者、ファブリケーターが協力して三者一体となって頑張れるような体制を作っていただけたらと思います。鉄鋼連盟にも、そういう働きかけをしていただけると嬉しいです。

飯田●僕には鉄骨でこういうものをつくることできる機会はめったにないですから、すごく面白い経験でした。おそらくしよつ中こういう規模の建物をつくっている組織事務所やゼネコンの設計部の人たちとは違う感覚で、既製品でつくっていくだけではない、新しいものをつくり出したいという思いが、この建物に結び付いたようなところもあると思います。

京都的なものをどう形にするかというなかで生まれたデザインですが、金田さんや早稲倉さんたちや竹中工務店を中心としたファブの力がここに入って、いろいろな方たちの知恵や技術が集約されたような建築だと思います。そういうことが建築の面白さだったりしますよね。やはり空間も含めてどこにもないような、見たこともないようなものができていく感覚は嬉しいです。特殊なことはやりにくい時代になっているかもしれませんが、これからも新しいことに挑戦していきたいと思います。

(2018年6月25日 飯田善彦建築工房)

京都府立京都学・歴史館

所在地	京都府京都市左京区下鴨半木町
建築主	京都府
主要用途	大学施設
面積	敷地面積：116,932.79㎡ 建築面積： 6,716.04㎡ 延床面積： 23,940.68㎡
構造	鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
階数	地下2階 地上4階
最高高	18,430 mm
意匠	飯田善彦建築工房
構造	構造計画プラス・ワン
施工	竹中工務店・増田組・あめりか屋 特定建設工事共同企業体
設計期間	2011年10月～2012年12月
施工期間	2013年8月～2016年7月

写真提供：鈴木研一／鈴木研一写真事務所
(表紙、p.2-3、6、11上、12、13、14)
笹倉洋平／笹の倉舎
(p.4、11下)

設計者プロフィール

飯田善彦 (いいた よしひこ)

1950年 埼玉県生まれ
1973年 横浜国立大学工学部建築学科卒業
1973年～計画設計工房(谷口吉生、高宮真介)、
建築計画(共同：元倉真琴)
1986年 飯田善彦建築工房設立
2007年～2012年 横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授
2012年 自身の設計事務所に併設するかたちで
ArchshipLibrary&Cafeをオープン

渡邊文隆 (わたなべ ふみたか)

1981年 栃木県生まれ
2007年 横浜国立大学工学府社会空間システム学
科建築学コース修了
2007年～現在 飯田善彦建築工房

金田勝徳 (かねだ かつのり)

構造設計一級建築士、JSCA建築構造士、工学博士
1944年 東京生まれ
1968年 日本大学理工学部建築学科卒業
1968年～1986年 石本建築事務所
1988年 構造計画プラス・ワン設立
2006年～2011年 芝浦工業大学建築学科特任教授
2011年～2014年 日本大学理工学部建築学科特任教授

早稲倉章悟 (わせくら しょうご)

1978年 愛知県生まれ
2001年 名古屋大学工学部社会環境工学科卒業
2003年 名古屋大学大学院環境学研究科都市環
境学専攻修士課程修了
2003年～構造計画プラス・ワン
2017年 同社代表取締役



一般社団法人 日本鉄鋼連盟
建築委員会

東京都中央区日本橋茅場町 3-2-10

Tel.03-3669-4815 Fax.03-3667-0245

<http://www.jisf.or.jp>

編集協力: 株式会社建報社

2018 年 9 月 20 日発行

本書は著作権法上の保護を受けております。
無断で複写、複製することは禁じられています。